



多賀城市遺跡調査報告会

—平成 25 年度の調査成果—



平成 26 年 7 月 12 日 (土)

会場 多賀城市中央公民館
第 3・4 会議室 (文化センター内)

主催 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市遺跡調査報告会

1 開 会 13:30

開会挨拶 多賀城市教育委員会 教育長 菊地 昭吾

2 報 告

(1) 多賀城跡第86次調査

宮城県多賀城跡調査研究所 高橋 透 13:40～14:00

(2) 山王遺跡第127・128・135・136次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 村上 詩乃 14:00～14:20

(3) 西沢遺跡第24・25次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 小原 一成 14:20～14:40

休 憩

(4) 桜井館跡第3次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 相澤 清利 14:50～15:10

(5) 八幡館跡第7次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 板垣 泰之 15:10～15:30

質疑応答

3 閉 会 15:40

閉会挨拶 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 板橋 秀徳

※ 閉会后、速報展見学 多賀城市埋蔵文化財調査センター展示室

～16:30

I 多賀城跡第 86 次調査の成果

宮城県多賀城跡調査研究所

調査要項

所在地：多賀城市市川字坂下

調査期間：平成 25 年 5 月 27 日～11 月 20 日

調査指導：多賀城跡調査研究委員会

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所

調査面積：約 350 m²

1 調査の目的

近年、多賀城創建当初（724）の外郭南辺は、政庁—外郭南門間道路上で見つかった八脚門跡や門跡に向かって伸びる塀跡の基礎地業の発見から（第 1 図）、多賀城碑のある丘の外郭南門跡や築地塀跡よりも約 120m 北側にあったと考えられるようになってきています。今回は塀跡の本体を確認し、構造や規模、変遷を明らかにすることを目的に調査しました。

調査区は政庁—外郭南門間道路の西側に広がる低湿地部（通称「鴻ノ池」）で、政庁の南方約 250m、政庁中軸線から西へ約 65m のところに位置し、南側へ緩やかに傾斜する地形となっています（写真①）。

2 調査成果

今回の発掘調査の結果、大きく（1）～（3）の成果を得ることができました。

（1）創建期材木塀跡の発見

調査区中央の地山上で、東西方向に伸びる材木塀跡（SA3180）を検出しました（第 2 図①、写真②～⑤）。検出した長さは約 1.4m で、材木塀跡は政庁—外郭南門間道路上の八脚門跡に向かって伸びており、一連の区画施設とみられます。この区画施設で塀跡本体を連続する状態で確認したのは初めてで、南北幅約 4.9m、高さ 90cm 以上の基礎地業（SX2959）の上に構築されています。

材木塀跡は基礎地業中央やや南寄りに、東西方向の溝を掘ったのちに立て並べられています。材木は面取りした直径約 20cm の丸材で、底面が平らに加工されています。上部は廃絶時に切り取られており、残存する高さは約 30cm です。溝は幅約 40cm、深さ約 30cm が残存しており、10cm 弱の石を少量含む黒褐色土で埋め戻されていました。

基礎地業は段階的につくられていました（写真②・③）。地業の下部（第 3 図 SX2959-

2～4層)は、木材と盛土、および木材の加工時に生じる削り屑(はつり材)による南北幅約4.9m、高さ約70cmの地業です。構築にあたっては、まず北端に南北約2mの幅ではつり材を敷き(4層)、南端には伐採して枝をはらったのみの直径最大約36cm、長さ1.6m以上の木材を置いたあと、その上に直径約20cm、長さ1.0m以上の加工した材を南北方向へ置きます。続いてそれらの上に南北幅約3.3mの範囲で直径10～30cmの丸太材やその割材を東西方向に並べながら2～3段重ね(3層)、さらにはつり材を挟んだ黒褐色の粘土を盛っています(2層)。

基礎地業の上部(第3図 SX2959-1層)は、下部中央約2.6mの範囲に褐色と黒色の粘土で交互に土を盛っています。上面は削られていましたが、高さ約20cmが残存し、北・南端には10～15cm大の石が並んでいました。遺物は、基礎地業下部から土師器甕、基礎地業上部から土師器坏、付札状の木簡が出土しています。

(2) 材木堀廃絶後の盛土遺構を確認

材木堀が廃絶したあと、その基礎地業に土を盛って盛土遺構(SX2962)をつくっていることが分かりました。これは4年前に実施した第81次調査で検出したものの西の延長上に位置しており、同一のものと考えられます。また比較的短期間に流れてきた自然堆積土で覆われるたびに土を盛り直して補修し、10世紀前葉頃に降った灰白色火山灰降下後まで高まりが維持されていたことも分かりました。

最初の盛土(SX2962A)は、材木堀跡を切り取って基礎地業上面を削ったのち、灰白色の粘土や10～20cm大の石を多く含む暗黄褐色土で基礎地業を覆うように盛土しています(第2図②、写真⑥)。盛土の厚さは最大約20cmで、断面形は下の基礎地業を含めて、上面が平らな台形状となっています。規模は上幅2.0～3.0m、下幅5.2～6.0mで、高さは約1.5mです。両側の斜面には10～20cm大の石を貼っており、その痕跡と思われる凹みも多数検出しました。北側の斜面裾では石列も確認しており、これらの石は護岸や土留めの役割を果たしたと考えられます。なお南側には崩落土が20～40cmの厚さで堆積していました。

その後の盛土(SX2962B～E)による補修は、灰色粘土や黄褐色砂からなる厚さ10～30cmの堆積層を挟んで繰り返されており、それぞれの南北断面形は最初の盛土(SX2962A)と同じですが、中心が南へずれていくことを確認しました。

まず1度目の補修(SX2962B)では、堆積土上面を削って平坦面をつくったあと、厚さ約5cmの土を盛っています。2度目の補修(SX2962C)では、1度目と同様に平坦面をつくりだしたのち、南側に約20cmの黒色の粘土を盛っています。規模は上幅3.8m以上で、南端には杭列(SA2967)がつくられません(第2図③)。3度目の補修(SX2962D)は黄褐色土を盛り、上幅約4.1mで、北側に幅2.1～2.4mで深さ約0.5mの東西溝(SD3176)が伴います。そして灰白色火山灰降下後の4度目の補修(SX2962E)では灰色土などを約30cm盛っており、規模は上幅3.5m、下幅5.5mで、北側と南側

にそれぞれ幅 3.0～4.4m、深さ約 0.2m の東西溝 (SD3184・3185) を伴っています (第 2 図④)。

遺物は SX2962A から土師器碗、丸・平瓦、SX2962C から須恵器甕、平瓦、木製槌、獣骨が出土しています。また S D 3176 溝からは須恵系土器坏、土師器甕、須恵器甕、丸・平瓦、鉄製鎌、付札状木製品、獣骨が出土しました。

この盛土遺構 (SX2962) は、材木堀跡の基礎地業の高まりを利用して政庁一外郭南門間道路と坂下地区西側の丘陵を結ぶようにあることから、通路の機能を果たしたと考えられます。

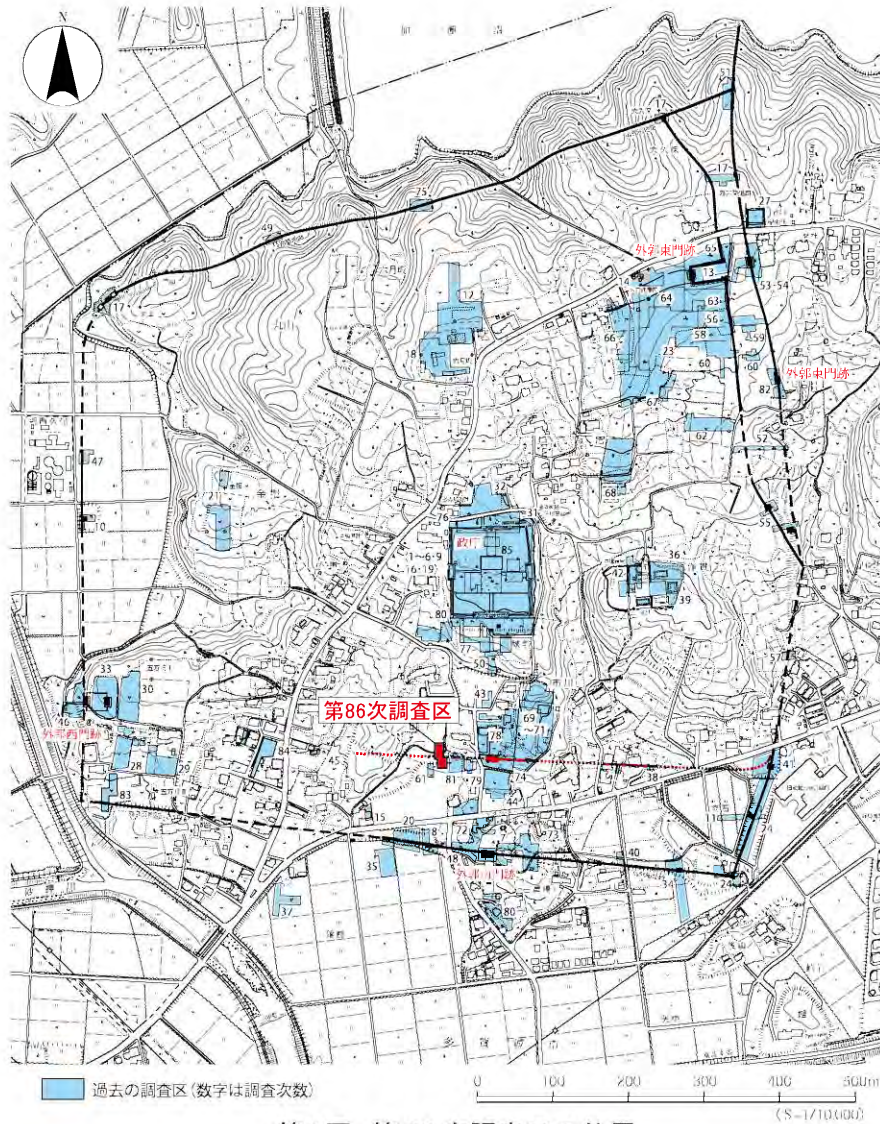
(3) 盛土遺構廃絶後の遺構を確認

盛土遺構が廃絶したあと、井戸 2 基、土壇 2 基のほか、掘立柱建物や多数の溝・小穴などがつくられていることが分かりました (第 2 図④、写真⑦)。井戸 (S E 3165) は直径約 1.5m の円形の穴を掘ったのち、一辺が約 0.8m、深さ約 0.8m の井戸枠をはめています。また井戸枠の部材は、建物などに用いられた柱を再利用していました。土壇 (S K 3167・3168) は直径約 40～50cm、深さ 10～20cm で、多数の土器が完形に近い形で折り重なるよう出土しました。掘立柱建物 (SB3182・3183) は、いずれも長軸約 20cm の小さい柱穴です。

遺物は整理用コンテナ 30 箱以上で、狭い調査区にもかかわらず多数出土しました。土器は多数の須恵系土器のほか、須恵器や土師器にくわえ緑釉陶器、灰釉陶器、白磁も出土し、10 世紀後半頃のものともみられます。それ以外にも丸・平瓦、木製品、土錘、製塩土器など多様な遺物が確認でき、調査区周辺が人々の活動する場になっていたことが分かりました。なお土師器のなかには、東北北部に分布の中心を持ついわゆる「ムシロ底」の土師器や非ロクロ成形の土師器甕が出土しており、注目されます。

4 まとめ

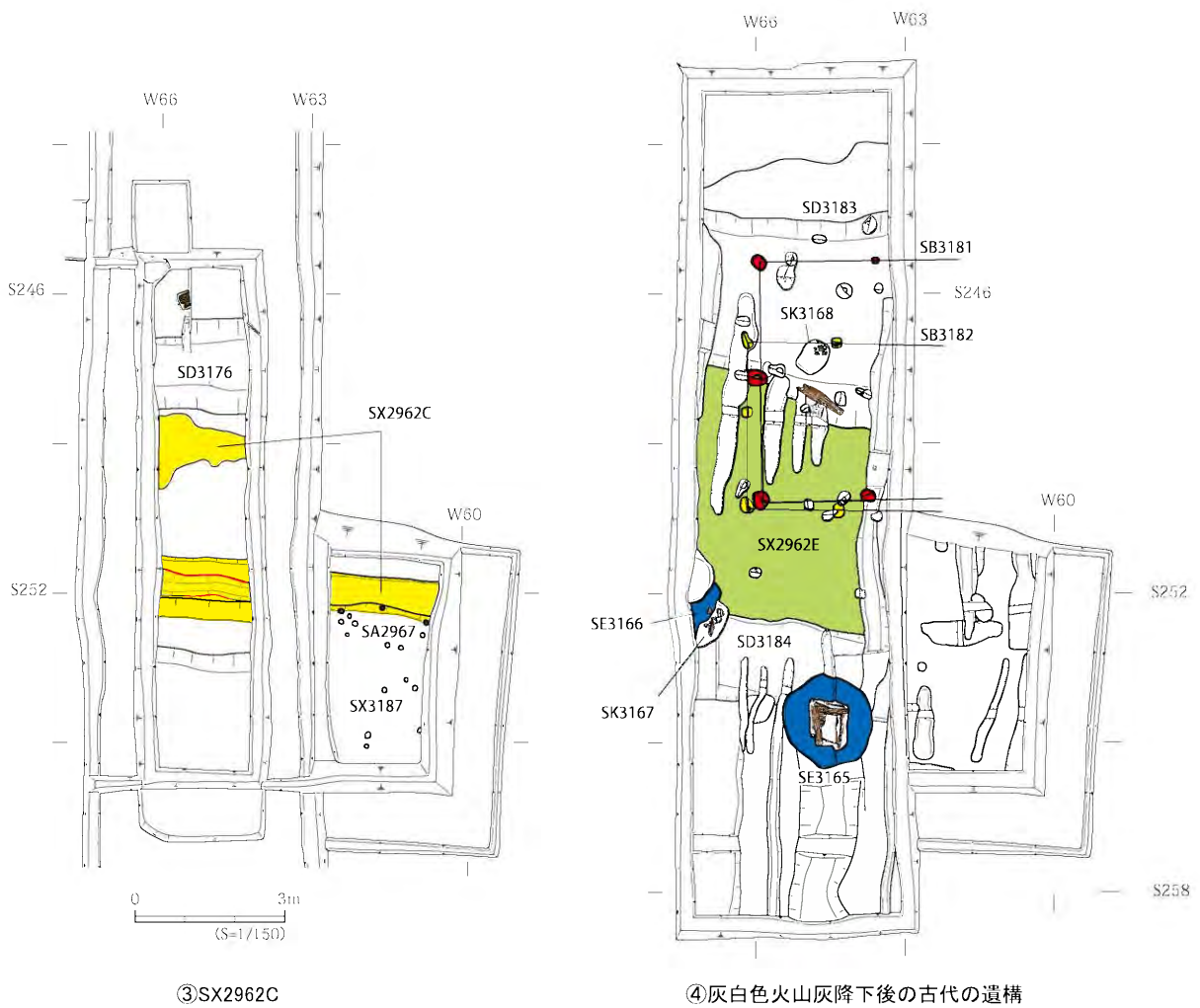
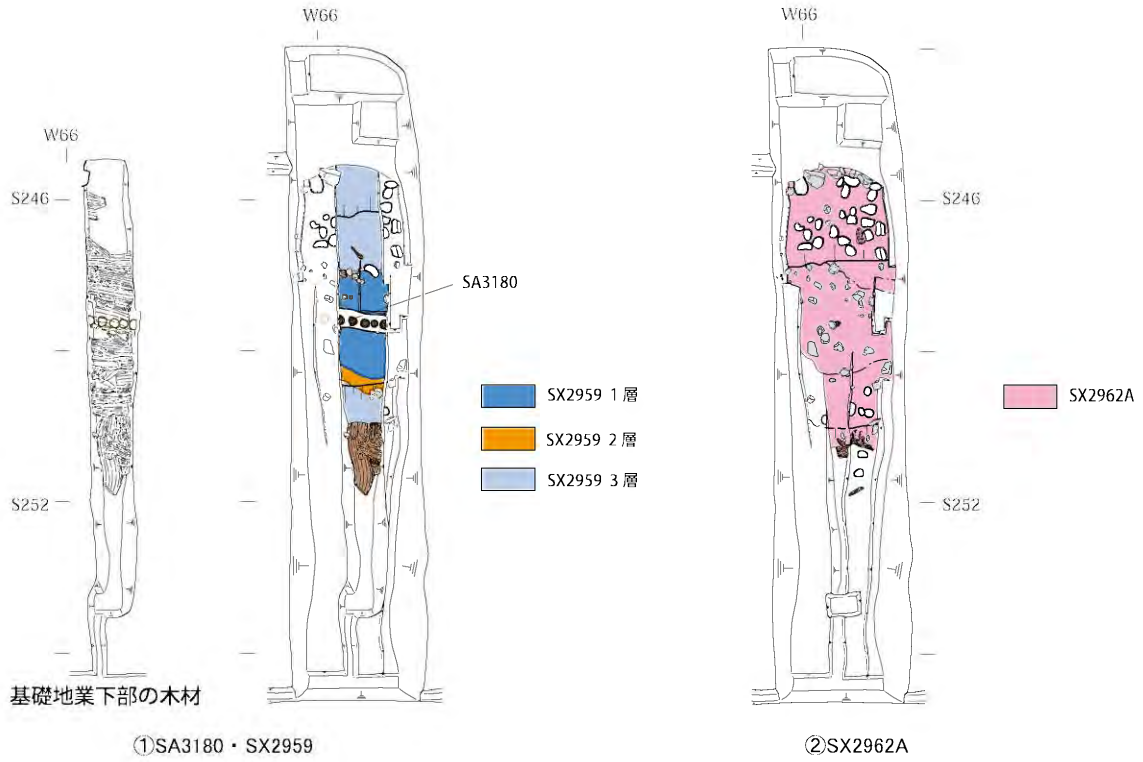
今回の調査によって多賀城創建期の八脚門跡に伴う堀跡を検出し、その構造や規模の詳細が明らかになり、一部ではありますが、創建時の外郭南辺とみられる区画施設の実態が判明しました。また材木堀廃絶後は、基礎部分の高まりに盛土をして通路として利用したとみられ、10 世紀代には調査区周辺が人々の活動する場として使われていたことが分かりました。従来、坂下地区での調査例は少なく、遺構の詳細は不明でしたが、創建期から 10 世紀頃までの変遷の一端を明らかにできました。



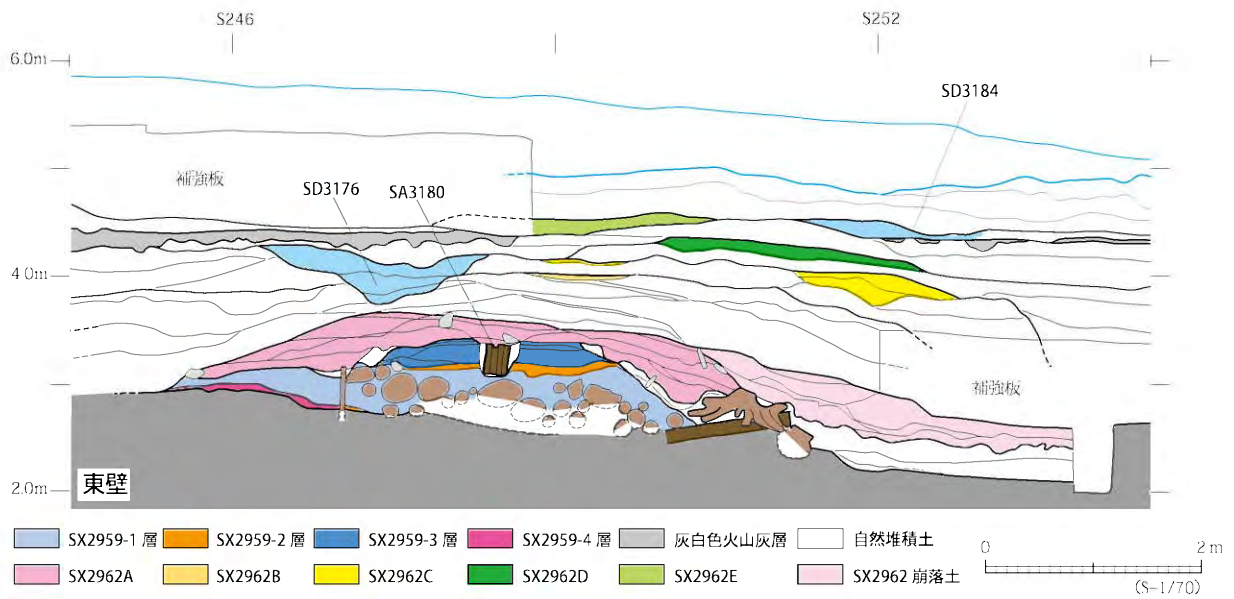
第1図 第86次調査区の位置



写真① 第86次調査区遠景(南西から)



第2図 第86次調査における遺構の変遷



第3図 第86次調査区土層図



写真② SX2959 基礎地業断面（北西から）



写真⑤ SA3180 材木堀跡（西から）



写真③ SX2959 基礎地業南半断面（西から）



写真⑥ SX2962A 盛土遺構（北西から）



写真④ SA3180 材木堀跡全景（南西から）



写真⑦ 盛土遺構廃絶後の遺構（南東から）

Ⅱ 山王遺跡第 127・128・135・136 次調査の成果

1 はじめに

山王遺跡は、政庁跡の南西に広がる広大な遺跡で、七北田川や砂押川の沖積作用によってできた標高約 3～4 m の自然堤防上にあります。これまでの調査により、古墳時代前期の水田跡や、古墳時代中期～後期の堅穴住居から成る集落跡、古代の方格地割、中世の武士階級の屋敷跡などが発見されています。

昨年調査を行った中山王地区（第 127・128 次）、山王三区（第 135・136 次）の 4 件でもそれぞれの時代の遺構が発見され、近隣調査との関係が明らかになりました。今報告では 2 つの地区をわけて報告します。（第 1 図）



第 1 図 平安時代の方格地割と調査区の位置

2 中山王地区の成果（第 127・128 次調査）

- ・第 127 次調査区では建物跡、井戸跡、柱穴、土壇が見つかりました。
- ・第 128 次調査区では水田跡、建物跡、井戸跡、溝跡、柱穴、土壇が見つかりました。

なお、当調査区の隣接地を平成 23・24 年度に調査しており、これらの成果と併せて時代ごとに報告します。

① 古墳時代（第2図）

第128次調査区の最下層で水田跡を発見しました。東西・南北方向の2条のあぜがあり、その規模は上幅1.7m、高さは50cmほどです。あぜとあぜの間に幅1.3mの隙間がありますが、これは田に水を引くための水口みなくちと考えられます。田んぼ土は10cmほどの厚さを残しており、耕した痕跡がはっきりと確認できました。遺物は土師器はじきの壺片つぼが出土しています。

ここで注目されるのは、発見したあぜの規模です。これまでの調査によって山王・新田遺跡にいだの広い範囲に水田があったことがわかっていますが、それらのあぜは大きいものでも幅1m前後、小さいもので40cm前後で、これらと比較すると幅の広いものであるといえます。なお、第128次調査区の東隣（第120次）で同様の規模のあぜが確認されていますが、傾きがやや異なっています。

調査区の範囲が狭く、また、発見された類例も少ないため、これらの大きなあぜがどのように広がっていたのかは、今後の調査に期待されます。

※第127次調査区では、この時代の層については未調査です。

② 古代（第3図）

当該地区は、奈良時代の終わりごろから平安時代にかけて段階的に整備された多賀城南面の道路網のうち、南1道路の南側、西8道路の西側にあたります。（第1図参照）

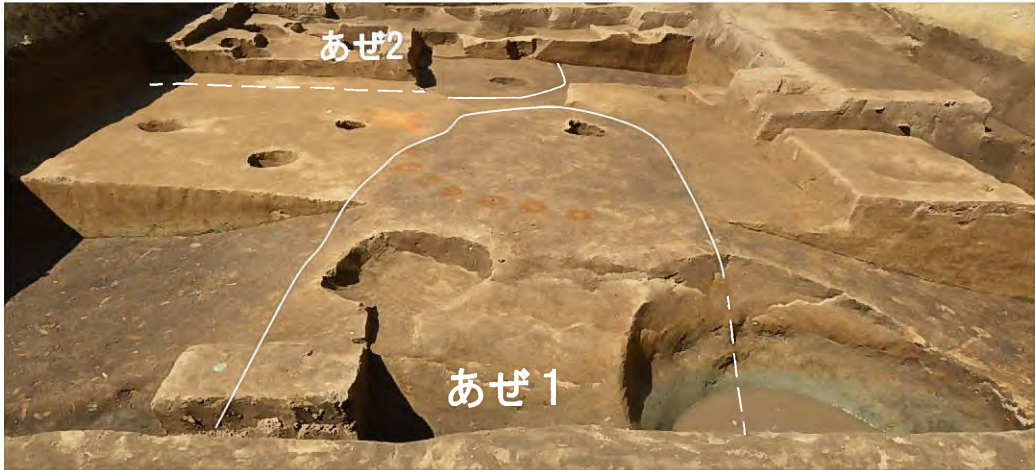
今回の調査では、なてあなじゆうきま 堅穴住居跡、溝跡、柱穴を発見しました。このうち、注目されるのは第128次調査区で発見した堅穴住居跡と溝跡です。堅穴住居の規模は東辺4.1m以上・南辺3.6m以上で、西辺と北辺は調査区外に延びていました。また、床面上に4基の柱穴があり、床面の周囲には深さ15cm前後の周溝しゅうこうを伴っていたことを確認しました。周辺の調査と合わせると、東隣（第120次）の掘立柱建物跡ほったてはしらの傾きと似ていることから、同時期に存在していた可能性もあります。南北方向に伸びる溝跡は、ほぼ同じ方向で2時期にわたって作り変えられていたことがわかりました。これは北隣の第94次調査区で発見された遺構とつながるものと推測されます。

出土した遺物にロクロを使った土師器はじき甕かめや、須恵器すゑきの坏つぎがあることから古代の遺構と考えられます。

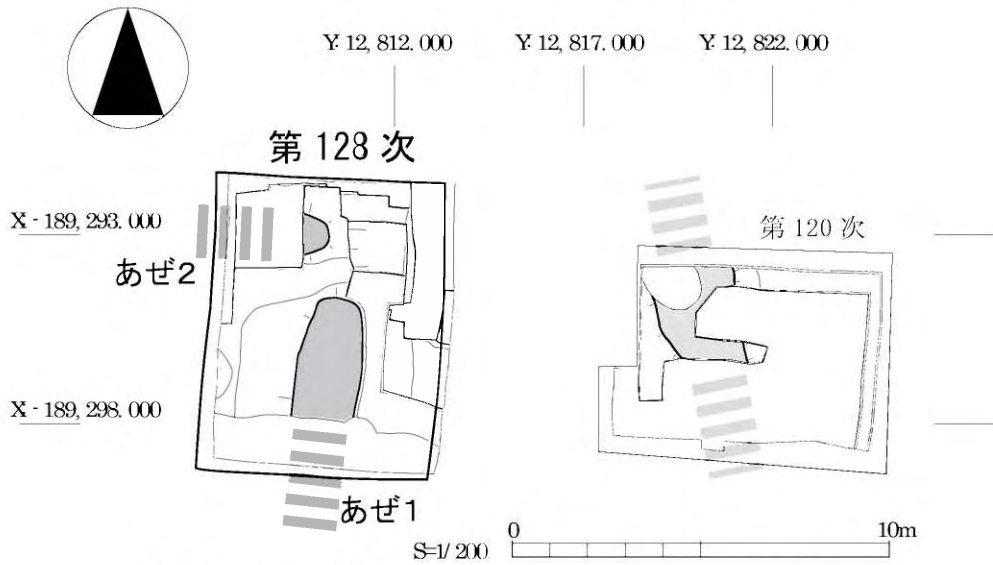
水田・・・古墳時代前期頃の水田一枚は、一辺が10m以内のものが多く見られ、現代の水田よりも小区画であったことがわかる。

堅穴住居・・・地面を掘って床とし、屋根をかけた半地下の住居。

周溝・・・排水のために床の周囲にめぐらされた小溝のこと。他にも、区画のために掘られた溝のことをいう。



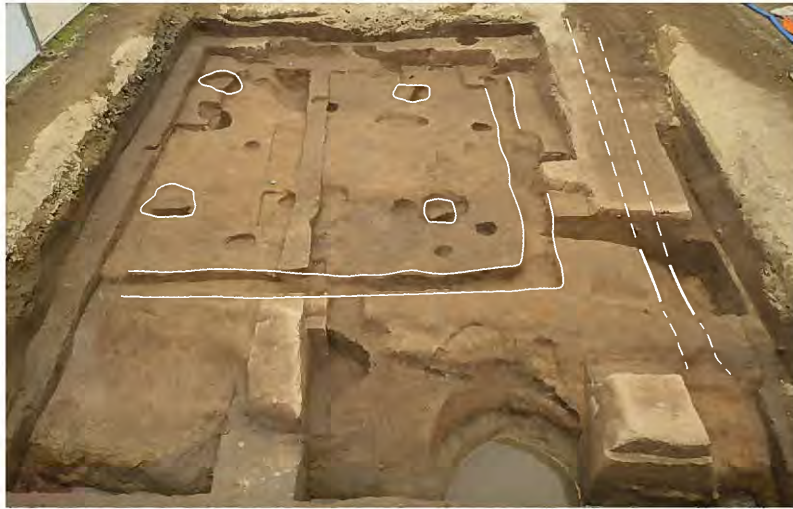
水田跡（第128次） 南から



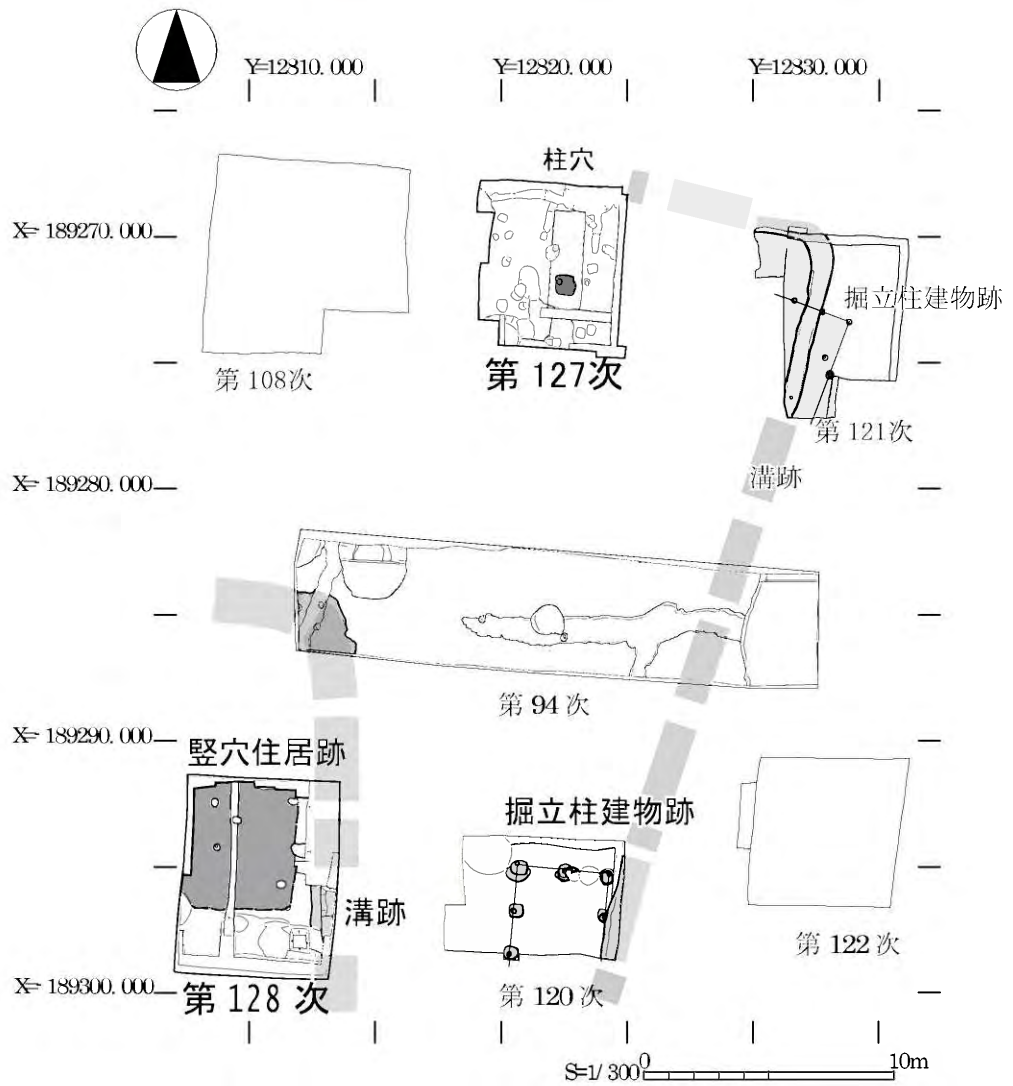
第2図 山王遺跡中山王地区平面図（古墳時代前期）



水田跡調査の様子 南西から



古代面（第128次） 南から



第3図 山王遺跡中山王地区平面図（古代）

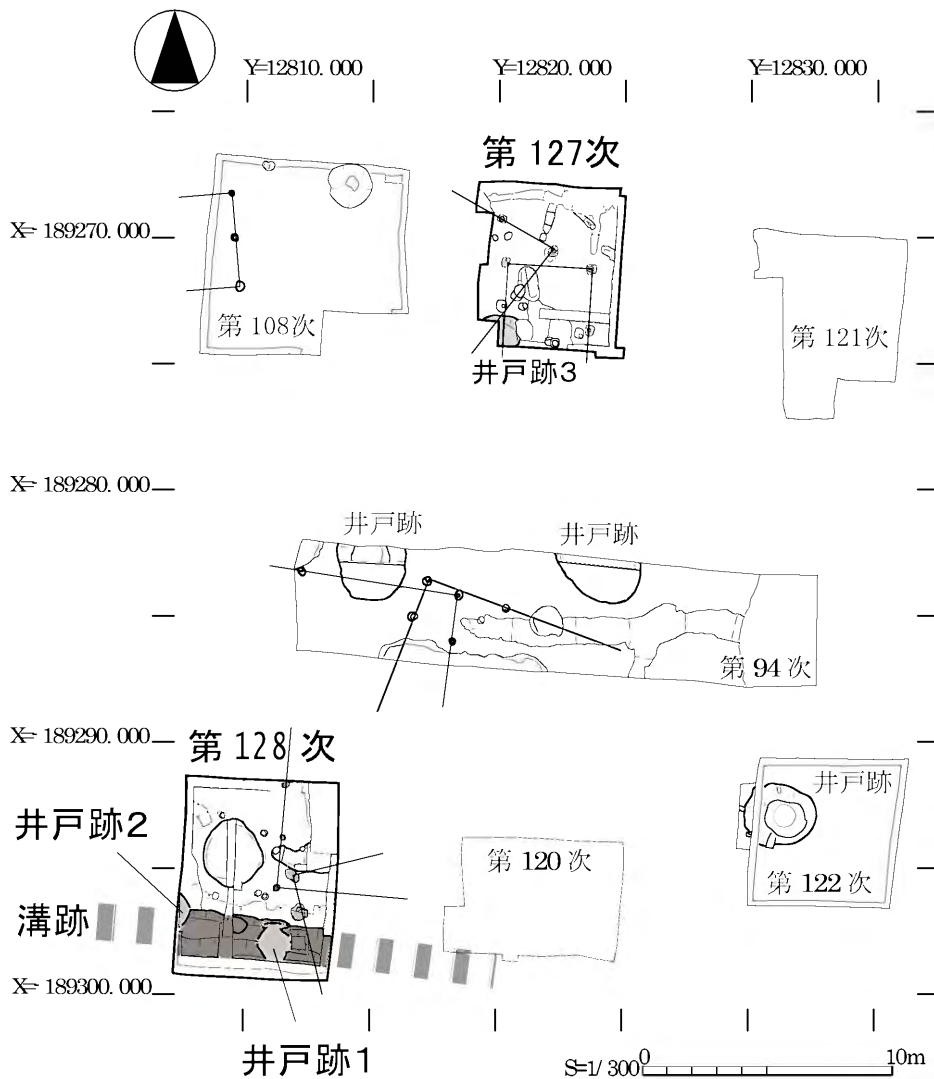
③ 中世（鎌倉・室町時代）（第4図）

井戸跡、掘立柱建物跡、溝跡、柱穴、土壙を発見しました。

井戸はいずれも素掘りのものです。第128次調査区で確認した井戸跡1はいっきに人の手で埋められていました。また、井戸跡2は自然に埋まっていったのち、最終的に人の手で埋められたことがわかりました。周辺の井戸に比べて規模が小さく感じられますが、溝に壊されているため全容は不明です。そして、2つの井戸より新しい東西方向の溝は、隣の調査区（第120次）では確認されていないため、南にそれていくものと考えられます。

また、第127・128次調査区でそれぞれ2軒の掘立柱建物跡が見つかりました。いずれも調査区の外に延びており、全体の規模を把握できたものはありません。

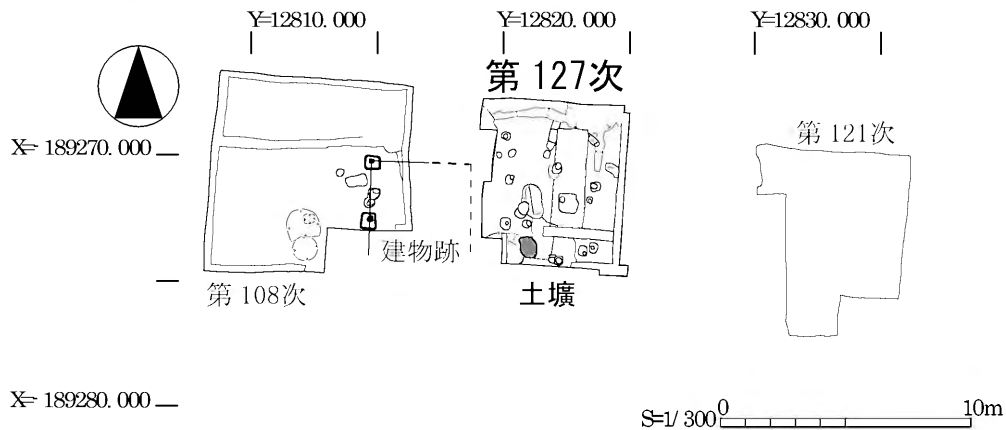
出土した遺物は古代の土器片のみで、年代を特定できるものではありませんでしたが、周辺調査の成果から中世の遺構と考えられます。



第4図 山王遺跡中山王地区平面図（中世）

④ 近世（江戸時代）（第5図）

第127次調査区で土壌が見つかり、18世紀頃の磁器片（紅皿）が出土しました。西隣の第108次調査区では柱材が残った建物跡が確認されていますが、第127次調査区では柱穴そのものが発見されなかったため、2つの調査区の間で納まる規模の建物と考えます。第128次調査区では近世の遺構は見つかっておらず、周辺の調査区の成果と合わせると下図のようになります。



第5図 山王遺跡中山王地区平面図（近世）

⑤ 中山王地区まとめ

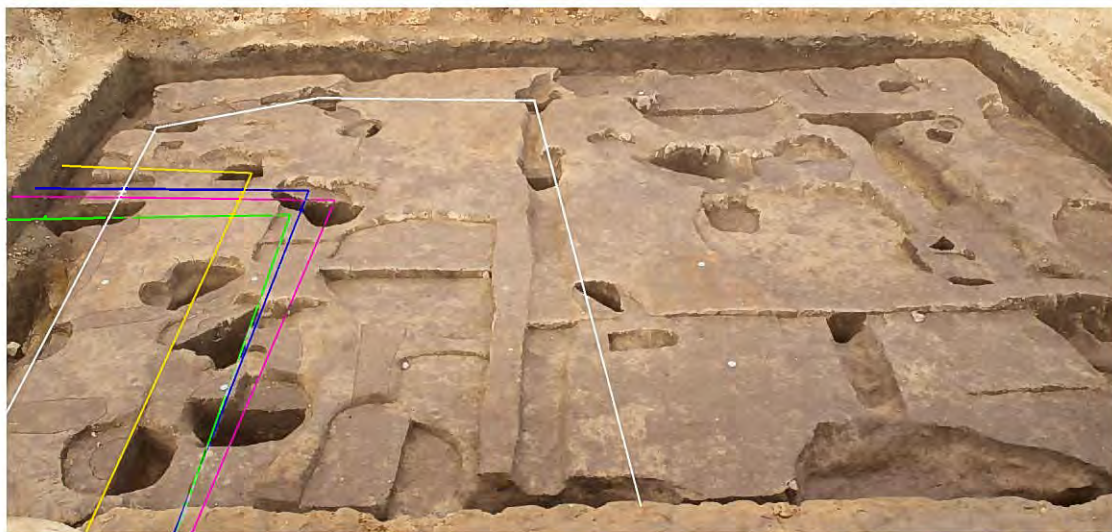
- ・古墳時代前期の水田跡を発見しました。類例の少ない大規模なあぜを伴っており、当時の水田のあり方を把握するための手がかりと言えます。
- ・古代の竪穴住居跡を発見しました。また、8 mほど離れた位置に同じ傾きの掘立柱建物跡があったことから、同時期の建物の可能性もあります。
- ・中世の掘立柱建物跡や素掘りの井戸跡を確認しました。
- ・近世を生活した人の生活が想像できる遺物が、第127次調査区で発見されました。

3 山王三区の成果（135・136次調査）（第6図）

第135次調査区は、第16次調査として平成3年に発掘を行ったところの一部です。今回改めて第一面のみ検出をしました。

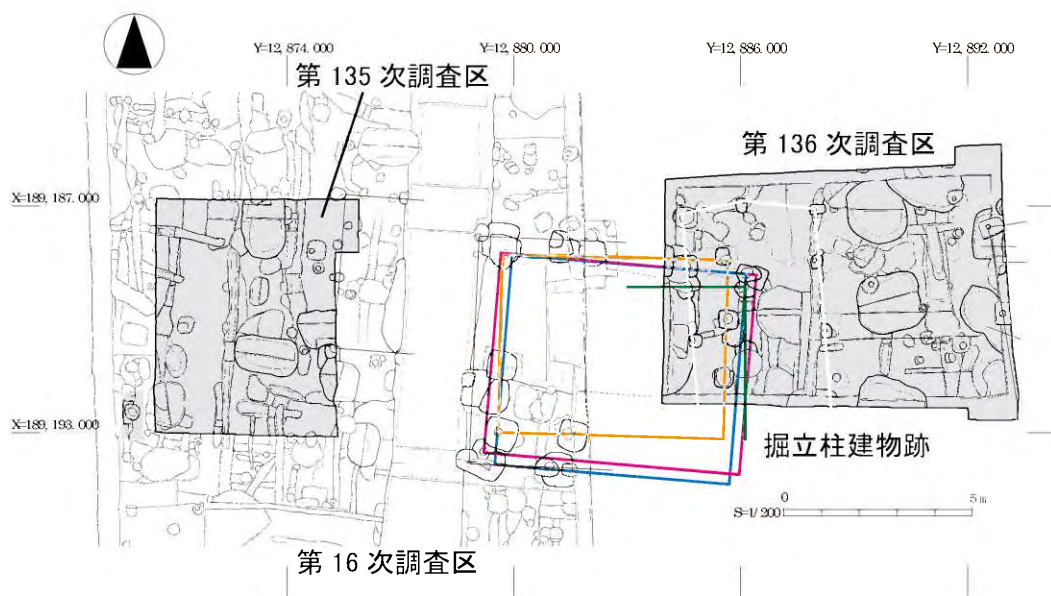
- ・第135次調査区では、古代の溝跡や柱穴、土壌があったことが再確認されました。
- ・第136次調査区では、古代の掘立柱建物跡、溝跡、柱穴、土壌が多数確認されました。

ここで注目されるのは、ほぼ同じ位置で3度もつくり直された、第136次調査区の掘立柱建物跡です。西隣の第16次調査の成果と併せると、いずれも桁行き5.9～6.8 m、梁行き4.7～5.6 mの規模で、東にひまし廂がつく建物であったことがわかります。傾きや規模にほとんど違いがみられないことから、用途に一貫性のある建物であったと考えられます。



第 136 次調査区全景写真（南から）

○が一番古い建物で、次に●が建てられた。後に、●●●の順に建て替えられている。



第 6 図 山王三区平面図（古代）

4 山王三区まとめ

古代の遺構が複数発見されました。建物跡は何度も建替えられており、比較的長期間にわたって使用されていたことがわかります。また、本調査区は東西大路に南面し、西7・8道路間の区画にあたります。刀子などの鉄製品もしていることから、役人の生活の場であった可能性も考えられます。

なお、中山王地区で確認した古墳時代の水田範囲を把握するために一部を同じ高さまで掘り下げましたが、水田跡は発見されませんでした。今回の調査区で確認できた

時代は古代のみですが、第16次調査区では中世の溝跡が発見されており、古代、近世において人々が生活していたことがわかります。



▲ 出土した紅皿片

◀ 第128次調査の様子



◀ 第136次調査の様子



▲ 136次出土鉄製品（左：刀子 右：鉄製のやじり）

土師器・・・古墳時代から平安時代まで製作された素焼の土器。

須恵器・・・古墳時代から平安時代まで製作された硬質の土器。窯で高温に焼きあげた。

掘立柱建物・・・地面に穴を掘り、そのまま柱を立てる木造建築のこと。

紅皿・・・化粧用の紅を塗りつけておき、指で溶いて用いる皿。

刀子・・・小型ナイフ。木筒もつかんを削ることなどに使われた、役人の必需品。

Ⅲ 西沢遺跡第 24・25 次調査の成果

調査要項

所在地 多賀城市浮島字高原 150 番
調査面積 435 m²
調査期間 平成 25 年 8 月 21 日～12 月 19 日
調査原因 集合住宅建設

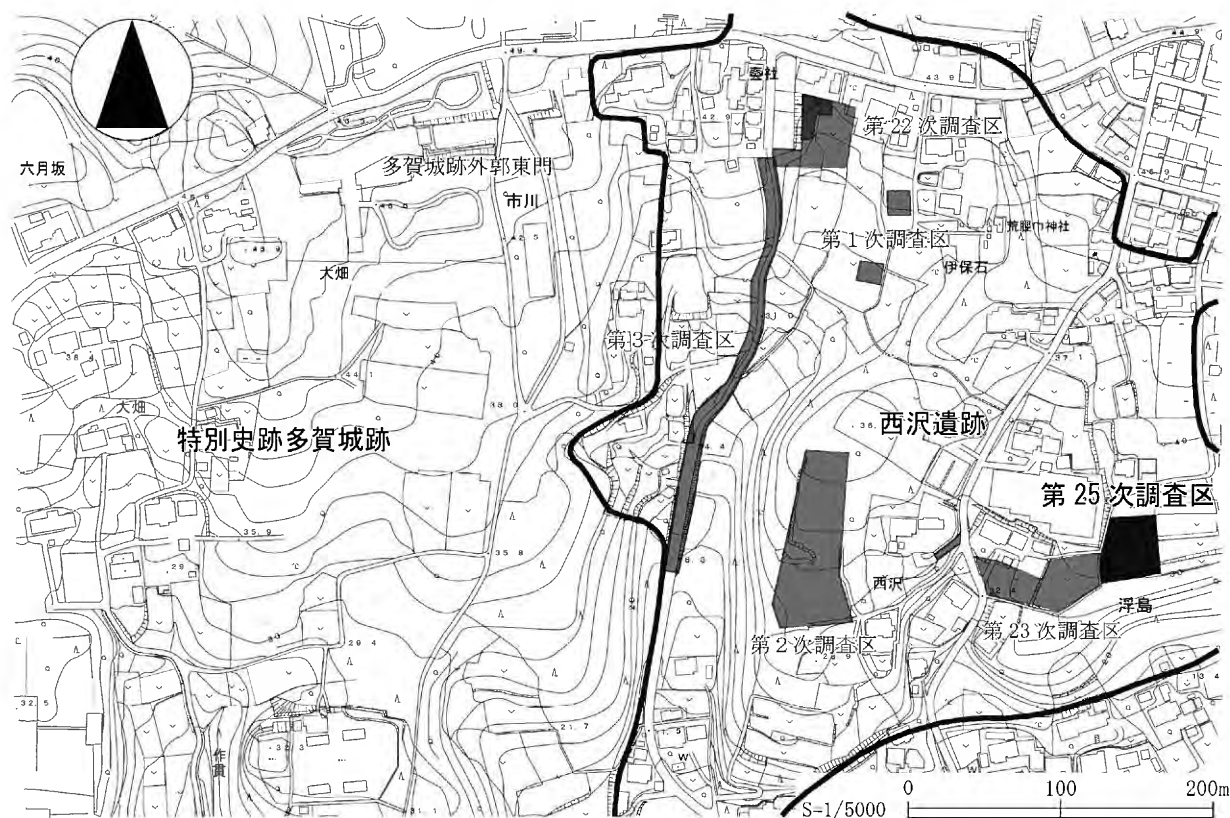


写真 1 調査区位置（南西より）

1 西沢遺跡について

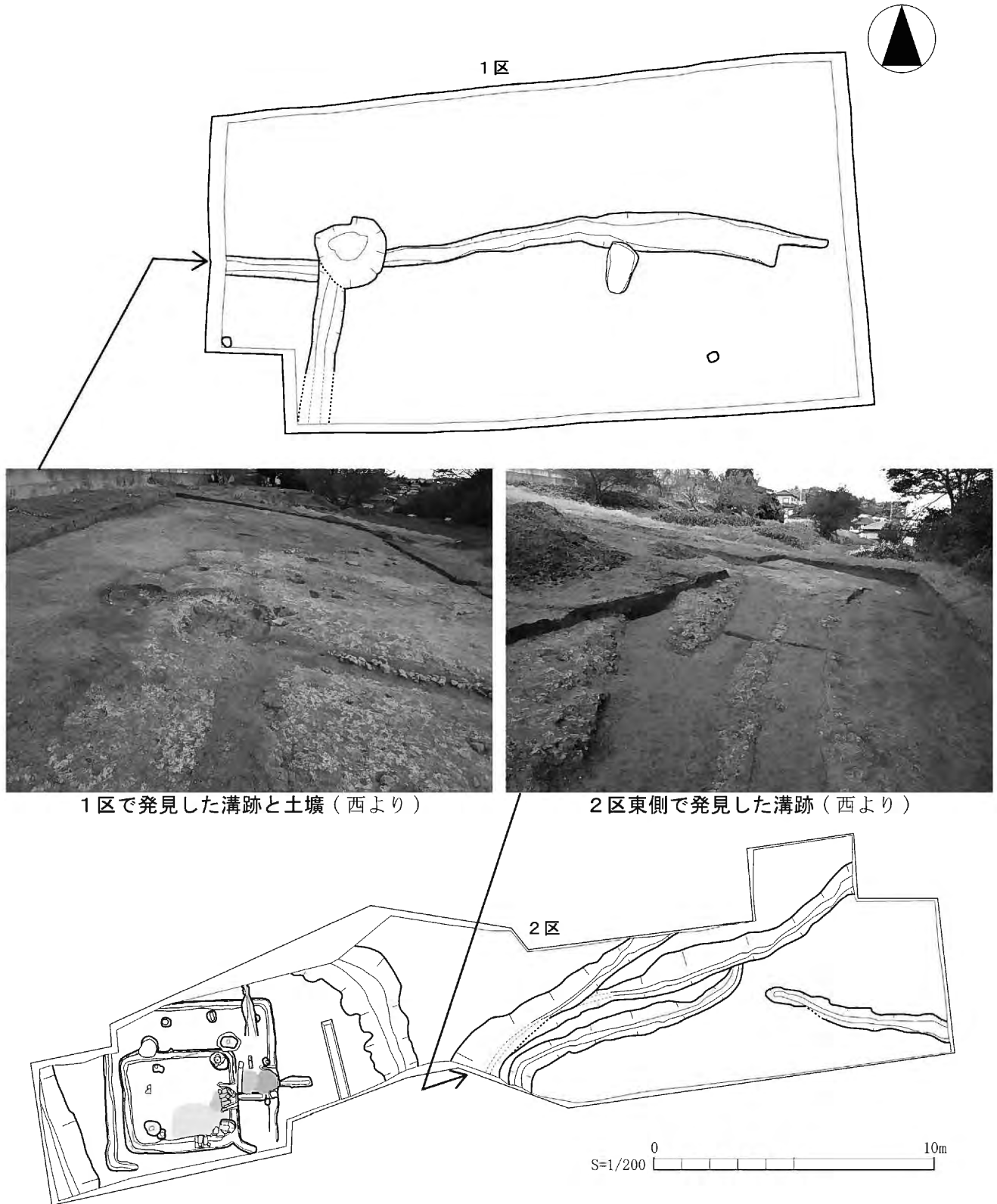
西沢遺跡は、市北部の市川・浮島地区にあり、特別史跡多賀城跡の東側に隣接している遺跡です【写真 1】。松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部に立地し、東西 450m、南北 700m の範囲に広がる遺跡です。標高は、北側丘陵尾根付近が約 46m、南側の沖積地と接する付近が約 6 m で、北から南に向かって低くなる斜面に位置しています。

本遺跡では、これまで 23 度の発掘調査を行っています【第 1 図】。第 2 次調査では、



第 1 図 西沢遺跡の範囲とこれまでの調査位置

一辺 8 m を超える平安時代の^{たてあな}竪穴住居跡や、大型^{ほったてばしら}掘立柱建物跡、倉庫と見られる^{そうぼしら}総柱の掘立柱建物跡を発見しました。第 3 次調査では、平安時代の^{かじ}鍛冶工房跡を発見しました。これらは、遺構の規模や性格などから、いずれも西側に隣接する多賀城跡との関



第 2 図 発見遺構全体図

連性が想定できます。

一方、第2次調査では中世頃の整然と配置された30棟を超す掘立柱建物跡群も発見しました。立地も含め沖積地の新田遺跡や大日南遺跡などで確認されている大規模な屋敷群との構造的な違いも注目されます。

今回の調査区は、遺跡の中央やや東寄りに位置しており、比高差約4mで北から南に傾く斜面となっています。平成23年度に調査した西側隣接地では、古代の竪穴住居跡や、古代から中世頃の掘立柱建物跡を発見していることから、今回の調査区にも同時期の遺構が広がっていると予想しました。

2 調査成果

今回の調査では、古代の竪穴住居跡2軒、古代以降の溝跡9条、土壇1基などを発見しました【第2図】。竪穴住居跡は小さくて古いものと大きくて新しいものが入れ子状になっていました【写真3】。また、どちらの竪穴住居跡にも、東壁に煮炊き用のカマド【写真2】が造りつけられていました。今回は、おもに竪穴住居跡について詳しく紹介します。



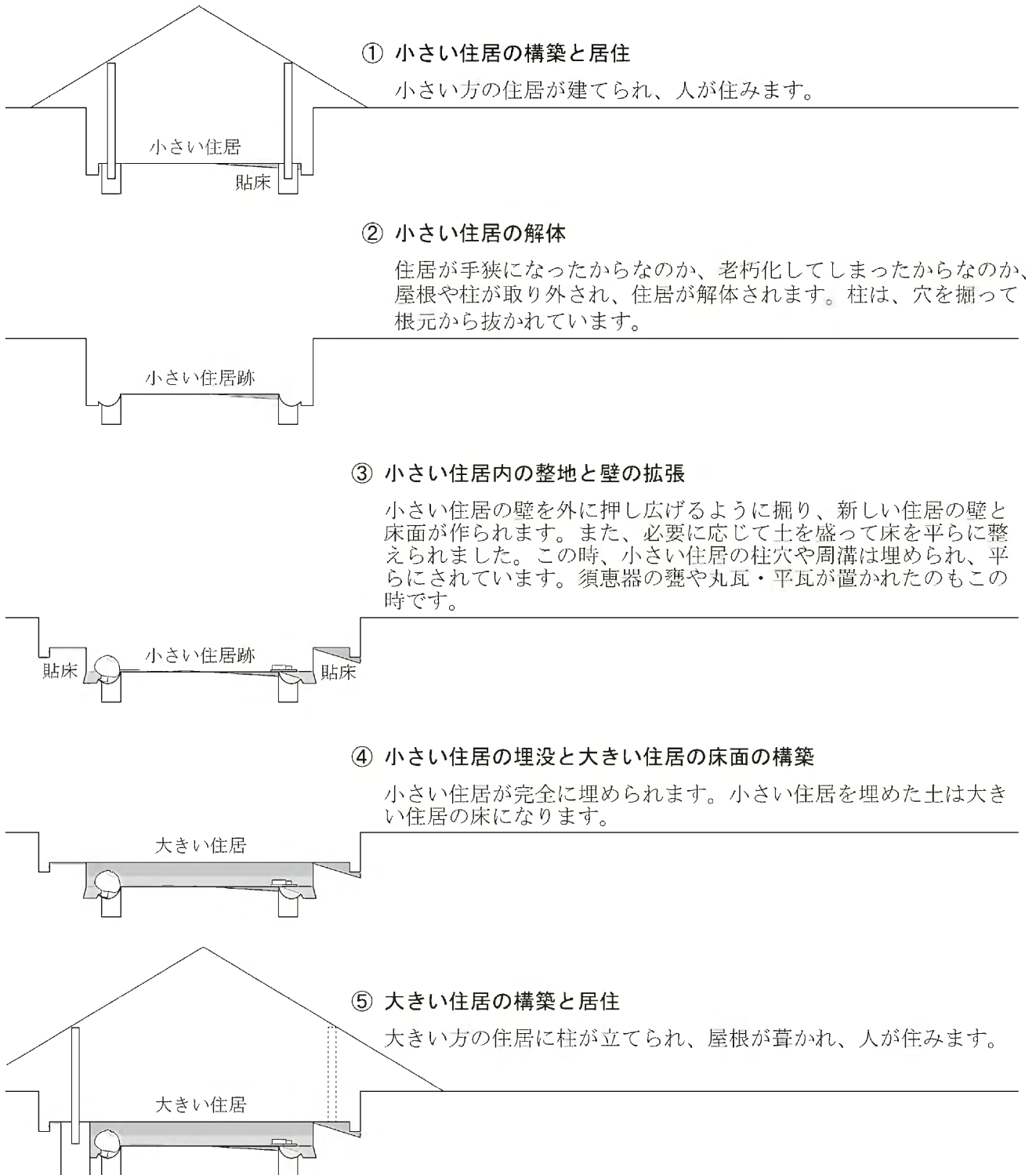
写真2 カマドの復元模型



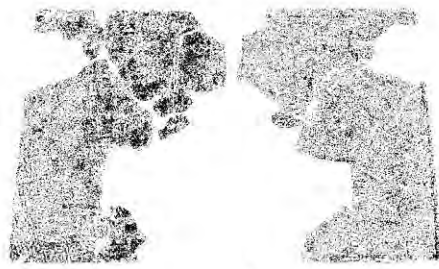
写真3 調査区南西隅の2軒の竪穴住居跡(西より)

(1) 入れ子状の 竪穴住居跡

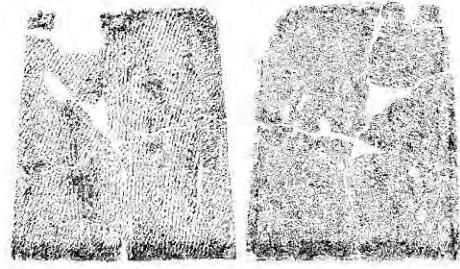
2軒の竪穴住居跡は、住居が同じ場所で拡張して建て替えられたために、入れ子状になって発見されました。小さくて古い方の住居が手狭になったからなのか、それとも老朽化したから建て替えられたのでしょうか。住居の建て替えに関しては、以下のような手順で行われたことが分かりました【第3図】。



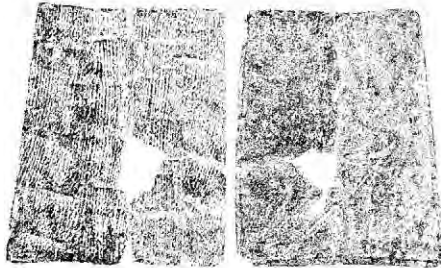
第3図 竪穴住居の拡張のようす(横から見た模式図)



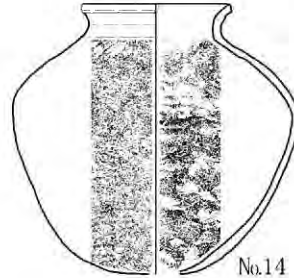
No. 15・18



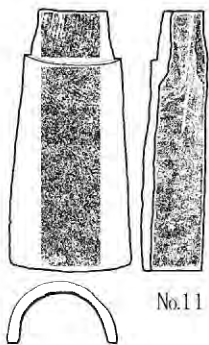
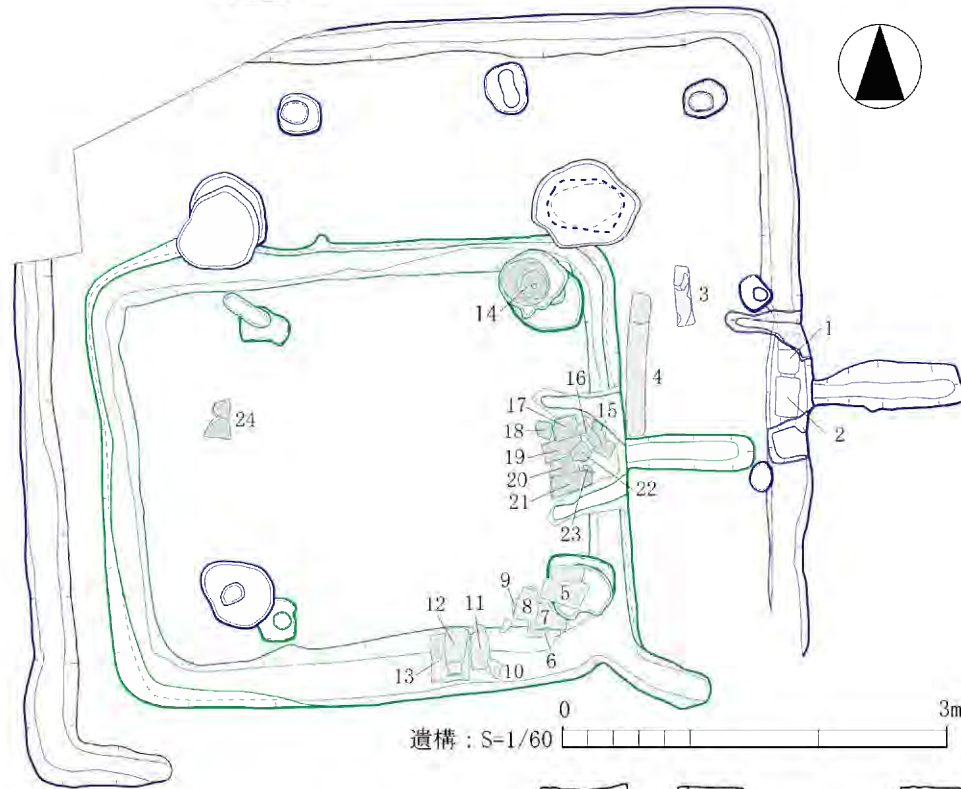
No.10・20・21



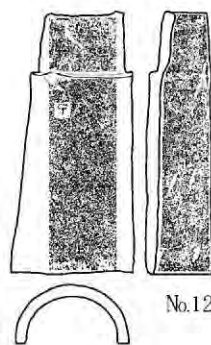
No.17・19・22



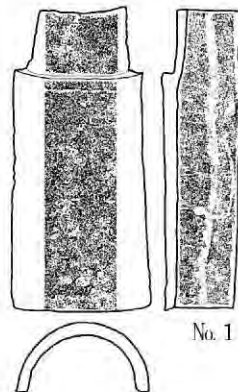
No.14



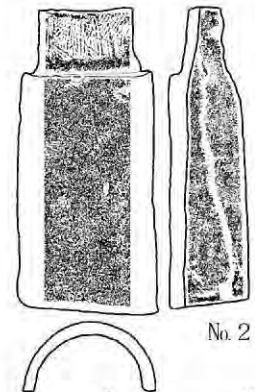
No.11



No.12



No. 1



No. 2



遺物：S=1/10 0 20cm

第4図 竪穴住居跡から出土した古代の須恵器甕と平瓦(上)・丸瓦(下)



写真4 カマドに敷かれた平瓦(西より)



写真5 南東隅に置かれた丸瓦・平瓦
(北西より)



写真6 さかさまで出土した須恵器甕
(南西より)

(2) 小さくて古い竪穴住居跡の様子

東西約 4.1m、南北約 3.6m、面積約 14 m²の隅丸方形の竪穴住居跡です。深さは 24 cm 残っており、新しい住居によって掘削された分を加えると、50 cm 以上の深さの竪穴住居であったと考えられます。岩盤を平らに整えて床にしており、一部で土が貼られています。

住居のやや東寄りに 4 本の主柱穴(上屋部を支える柱)が配置されています。また、壁に沿うように周溝が造られています。この溝は、南東隅で住居外に伸びていることから、住居に入ってくる水を外に出すための排水溝と考えられます。

カマドは褐色の粘質土で造られており、基底部だけが袖状に残っていました【写真4】。また、煙道(屋外に排煙するための施設)が住居から東側に 1 m 伸びていました。カマド内の燃焼部には平瓦が敷かれていました。カマドの下の周溝は埋め戻されています。よって、カマド下部の周溝では、水を土に浸み込ませて通していたと考えられます。平瓦は、浸み上がってくる水から燃焼部を守るために敷かれたと考えられます。

柱が抜かれ、上屋が解体され、周溝が埋められた後の住居南東隅には、丸瓦が 2 点、平瓦が 5 点置かれていました【写真5】。大きくて新しい住居のカマドの構築材として使うために用意されたものと考えられますが、結局使われることなく住居とともに埋められていました。

住居を埋める段階で、須恵器の甕が捨てられています【写真6】。この甕はほぼ完全な形で残っていたことから、この住居で使用されたものと考えられます。

(3)大きくて新しい竪穴住居跡の様子

東西約 6.5m、南北約 6.1m、面積約 39 m²の隅丸方形の竪穴住居跡です【写真 7】。深さは 26 cm 残っていました。床は、大部分は小さくて古い住居の埋め土であり、一部で土を貼っている部分や岩盤を平らにしたのみの部分もあります。

住居のほぼ中央に 3 本の主柱穴が配置されています。また、北壁と東壁に沿うように、主柱穴よりも小さい柱穴が配置されています。小さくて古い住居と同様に、排水用の周溝が壁に沿って造られています。

主柱穴は、南東側にだけはありませんでした。南東側の柱の推定位置は、カマド周辺の水はけを良くするために、一度南側に傾斜する浅い溝が掘られ、埋め戻されて平らにされている場所にあたります。このような場所に柱穴を掘って柱を立てると、水分が柱穴に及び、柱が根元から腐食してしまう可能性があります。よって、南東側だけは柱穴を掘らない何らかの方法で柱を立てていたと考えられます。

カマドは黄褐色の粘土で造られており、基底部だけが袖状に残っていました【写真 8】。また、煙道が住居から東側に 1.2m 伸びていました。カマドの前には長さ約 1.3m、幅 16 cm、高さ 12 cm の角柱状の製品が置かれていました。何に使われていたかは不明であり、今後の検討課題です。

カマドの下の周溝は埋め戻されており、その上には丸瓦が 2 点、蓋をするように置かれていました【写真 9】。小



写真 7 大きくて新しい住居跡
(北西より)



写真 8 カマド周辺の状況(北西より)



写真 9 カマドの下に置かれた丸瓦
(西より)

さくて古い竪穴住居跡と同様に、カマド下部の周溝では、水を土に浸み込ませて通していたと考えられます。丸瓦は、水から燃焼部を守るために置かれたと考えられます。

3 まとめ

今回の調査で発見された竪穴住居跡は、北から南へと傾斜する斜面の中腹に建てられています。調査中に2度台風が直撃し、雨水が調査区を勢いよく流れていくのを目の当たりにしながら、ここに住むためには十分な雨水対策が必要だと感じました。こうした状況にありながらも、当時の人々が、近隣の多賀城跡から調達した瓦を使って、様々な工夫を凝らしながら竪穴住居を建てている状況を窺うことができました【第4図】。今回の調査の一番の成果は、自然環境に適応しながら生活していく古代人の知恵を垣間見ることができたことと言えるのではないのでしょうか。

参考文献

多賀城市教育委員会 「Ⅷ 西沢遺跡第24次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成25年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第114集 2014 pp.125-131

多賀城市教育委員会 「Ⅱ 西沢遺跡第25次調査」『桜井館跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第115集 2014 pp.46-79



写真10 竪穴住居跡の調査風景

IV 桜井館跡第3次調査の成果

調査要項

所在地 多賀城市中央一丁目 104-1
調査面積 1,628 m²
調査期間 平成 25 年 5 月 9 日～10 月 31 日
調査原因 宅地造成

1 遺跡の概要

本館跡は多賀城市役所の西側に位置し、東西約 150m、南北約 120m の舌状に張り出した小独立丘陵の突端部（標高約 18m）に所在します。多賀城市内の中世城館跡は、現在 15ヶ所（多賀城跡の作貫地区など）が知られていますが、これらの大部分は破壊が著しく、遺構の不明瞭なものが多いようです。その中で本館跡は、丘陵南側が宅地造成によって削り取られているものの、北側は山林となっていたため大きな地形改変を受けずに現在に至っています。現況でも土塁と空堀が確認されることから市内でも希少な遺跡と言えるでしょう。

安永 3 年（1774 年）の「風土記御用書出」留ヶ谷村の項には、

一古館 二

野田

一屋はきか館 竪四十間 横廿五間

当郡田中村御境

一桜井館 竪三十間 横十五間

※約 54m × 約 27m

右二館共誰御居館と申儀並年月共相知不
申候事

との記載があり、江戸時代の中頃には誰の居館だったのかはわからないが、村人



中央の林のところが桜井館跡（仙台方面を望む）



第 1 図 桜井館跡位置図（昭和 39 年作成）

の間では古い城館として認識されていたようです。

多賀城町誌では、本館跡について留守氏家臣黒川某の居館と推測しています。しかしながら、この館跡については、その歴史的背景は謎に包まれており、今回の発掘調査によってその一端が解明されるものと期待されました。

2 調査成果

今回の調査では、館跡に伴うものとして、土塁、空堀（堀切）各1条、平場2ヶ所を発見しました。（第2図）

S X 1 土塁は、南北方向に19m以上、その北端では^{かぎがた}鉤型に屈曲して北斜面の落ち際を東西方向に約20m延びていくことがわかりました。さらにその東側は平坦面ですが、約20mにわたって積土が確認されました。規模は南北方向で上幅約1.5m、基底部の幅は約5～6mで、高さは約1mです。東西方向では平面の大きさは南北方向のものときほど変わりませんが、高さが一段低くなります。南北方向の土塁は、旧表土（黒褐色土）の面に空堀を掘削した土砂を積み上げて構築しています。

S X 2 空堀（堀切）は、土塁の西側に沿って南北方向に延びており約35mまで確認しました。規模は上幅約5.5～6.5m、下幅約1.3～2m、深さ1.3mです。土塁頂部と堀底面の高低差は約2.9mもありました。断面形は船底形です。

S X 3 平場は、西側を土塁、空堀で区切られた東西約50m、南北20m以上の広さで、南側の調査区外の部分を含めると南北約50mの正方形に近い平場であると考えられます。表土除去後すぐに地山面が検出されました。土塁積土下及び北斜面において存在した中世や古代の堆積層は確認できないことから、この平場については数10cmほ

多賀城市役所



調査区全景（上が東）



桜井館跡周辺の空撮写真（昭和36年撮影）



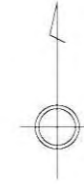
南より



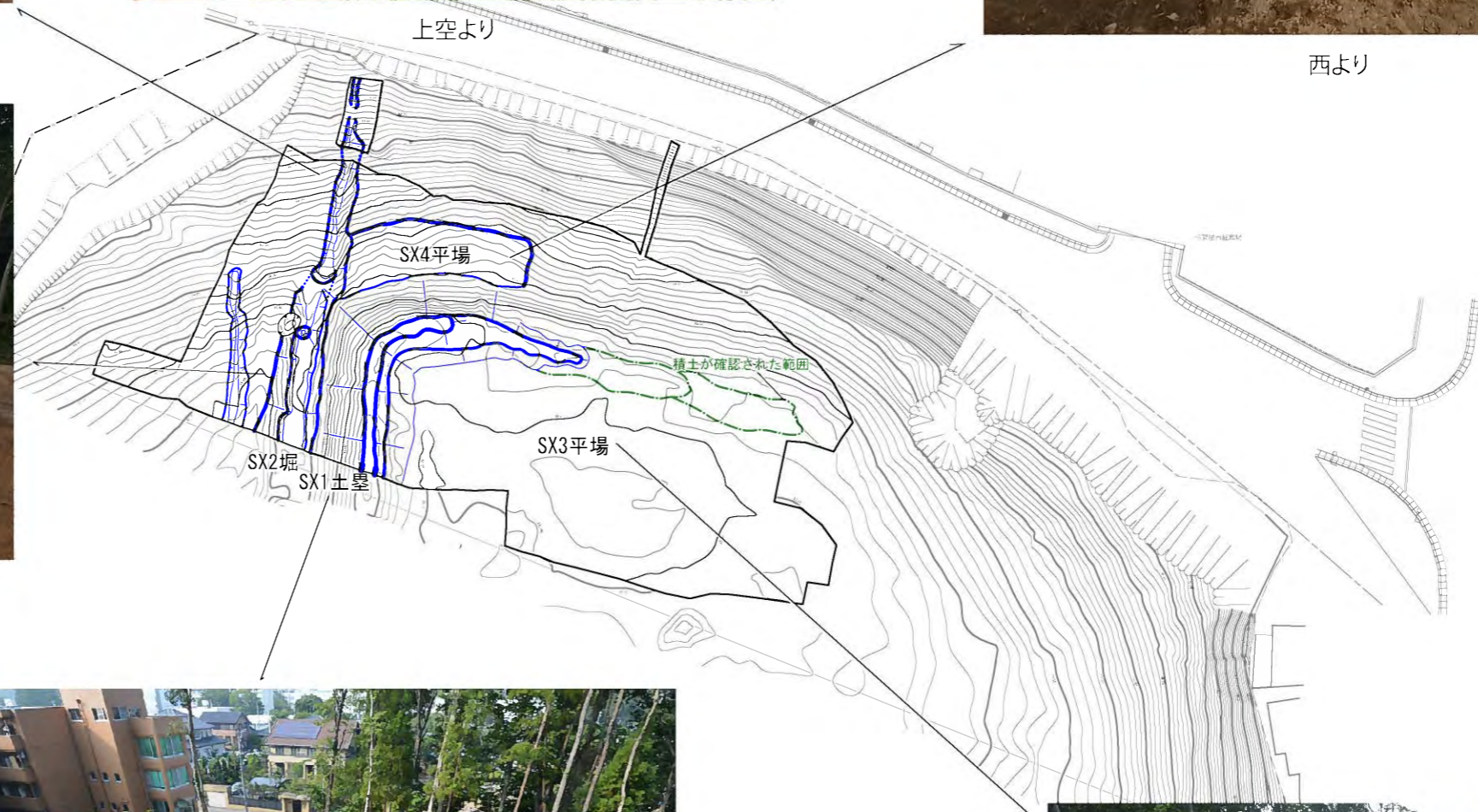
上空より



西より



西より



土塁積土断面の状況



空堀

土塁

南より



東より

第2図 発見遺構平面図(中世)

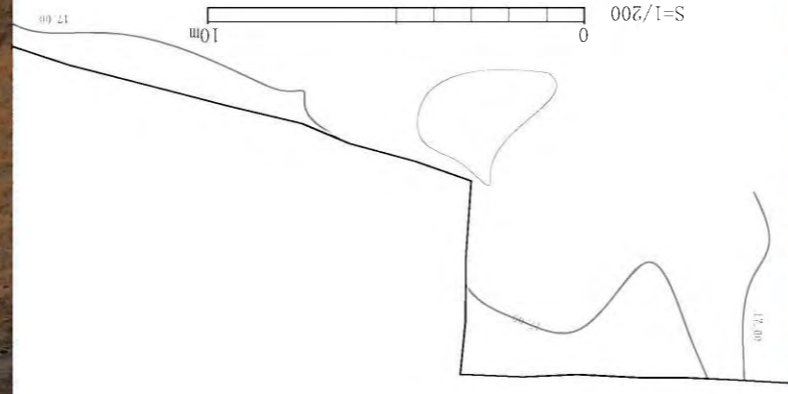
S X 8 焼成遺構完掘状況



S X 8 焼成遺構土層堆積状況



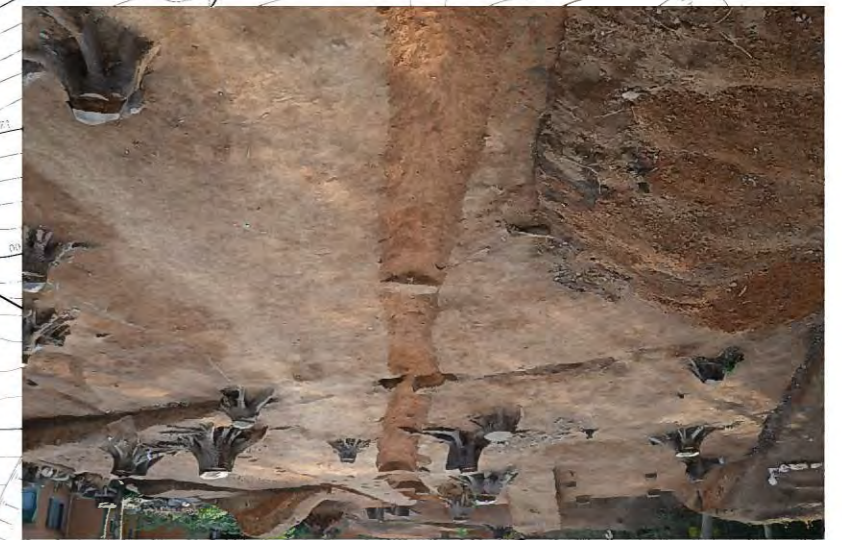
第3図 発見遺構平面図 (古墳時代後期～古代)



S 1 9 竪穴住居跡 北より



SD7溝跡 東より



S 1 1 0 竪穴住居跡 西より



ど削平して造った平坦面であることがわかりました。館跡に伴う中世の遺構・遺物は発見されませんでした。

S X 4 平場は、土塁のコーナー付近の北斜面に造られた郭輪くるわで、地山を削り出して造成していました。東西約 16m、南北約 5 m の小規模なものです。表土除去後すぐに地山面が検出されましたが、館跡に伴う遺構・遺物は発見されませんでした。

この他に、土塁の積土除去後の中世の旧表土面で、小溝群(畑跡)や東西方向の溝跡 1 条を発見しました。このことから、この地は耕作域から館跡へと土地利用が変わったことがわかりました。

また、その下層では古墳時代後期(7世紀)の竪穴住居跡 2 軒(S 1 9・10)、焼成遺構 1 基(S X 8)、古代の東西方向の溝跡 1 条(S D 7)を発見しました(第 3 図)。

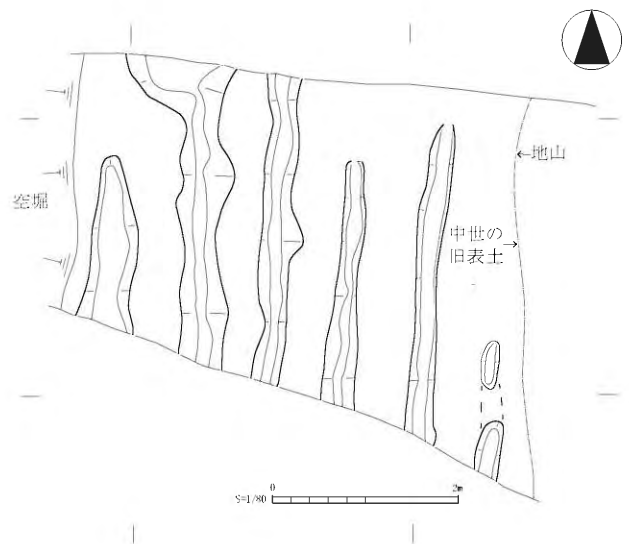
竪穴住居跡は、ほぼ同じ位置で建て替えられており、いずれにもカマドが設置されていました。焼成遺構は、長さ 90cm、幅 40cm、深さ 15cm の大きさと、底面に薄く焼土が堆積し、その上に厚く炭が堆積していました。

3 まとめ

本館跡は、出土遺物から直接遺構の年代を推定することは難しいのですが、土塁、空堀等の築城方法や文献資料及び放射性炭素年代測定結果から判断すると中世の城館と考えられます。館跡の立地する小丘陵は、南に延びる舌状台地ぜっしょうだいの東端にあり、立地的には東西南北を見渡せるところに位置しています。空堀(堀切)は尾根おねを切断するように造られており、これで区切られる平場(S X 3)は東西・南北約 50m の独立した空間を造りだしています。土塁はこの西辺と北辺を囲むように造られていましたが、東西方向の土塁は途中から徐々に高さが減じて平場と同じレベルの平坦面になっていました。この部分には土塁基底幅と同じ幅で積土が連続して約 20m にわたって確認されています。この部分については、元々土塁があったが何らかの要因(人為的あるい



SD5小溝群(南東より)



第 4 図 SD5小溝群平面図

は自然の営力)で崩壊し、基底部のみが残存したものと考えられます。したがって、土塁の構築当初は、東西約40mの規模を持っていたものと推察されます。また、この施設で区画される平場(S X 3)では、建物跡など居住に関連する遺構が全く発見されなかったことから、日常的に人々が暮らす場ではなかったこともわかります。このような施設は^{ぼうぎょ}防御的な役割を果たすとされており、周辺を監視する場や有事の場に備えた場などに使われたとも考えられます。

中世(おもに鎌倉時代)における多賀城市域は、おおむね旧七北田川(新田地区の南側を東流し砂押川と合流していた)を境として、北側に留守氏、南側に八幡氏の所領があったとされています。本館跡は両氏支配域の境界付近に位置していることになります。室町幕府成立時には、八幡氏と留守氏の間でも抗争があり、その後、八幡氏は留守氏に服属し家臣となっています。このような時代背景に本館跡が築城された意義が見いだされるのではないのでしょうか。

また、当時の留守氏の家臣団編成を伝える「留守分限帳」(天文17年:1548年に作成)には、さくらい(桜井)の名字がみられます。江戸時代にみえる桜井(館)に一致するのでさくらい(桜井)氏に関連する館跡との推定も可能です。



S X 2 空堀調査の様子

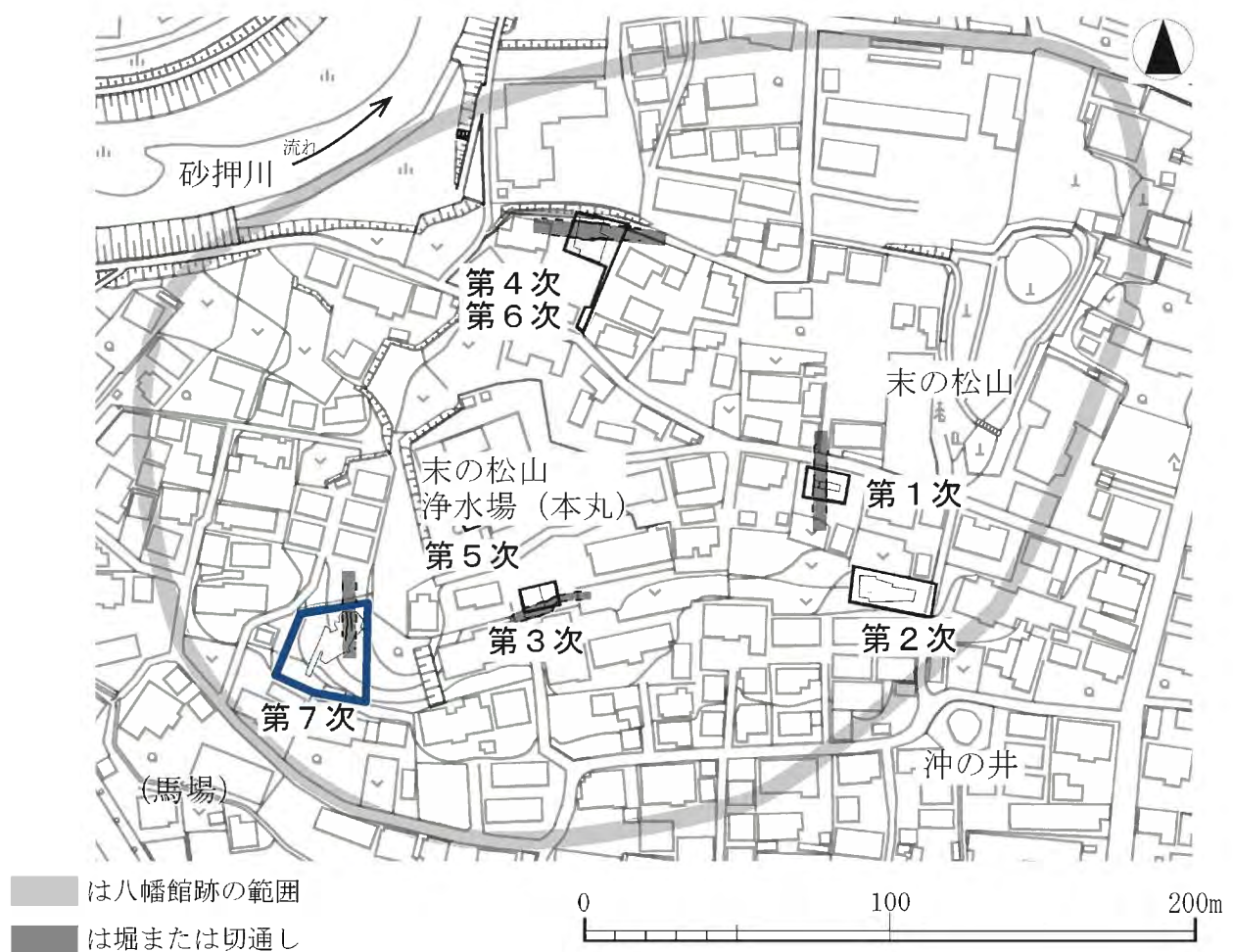
V 八幡館跡第7次調査の成果

1 遺跡の立地と調査概要

八幡館跡は、砂押川の右岸に位置する南北約200m×東西約300mの丘陵を中心とする中世の館跡です。歌枕の「末の松山」や「沖の井」にほど近く、江戸時代にはその周辺一帯は天童家の所領になっていました。その天童家の古地図によると丘陵部には「本丸」「古館」といった中世の館跡を連想させる地名がありました。現在丘陵の「本丸」にあたる場所には末の松山浄



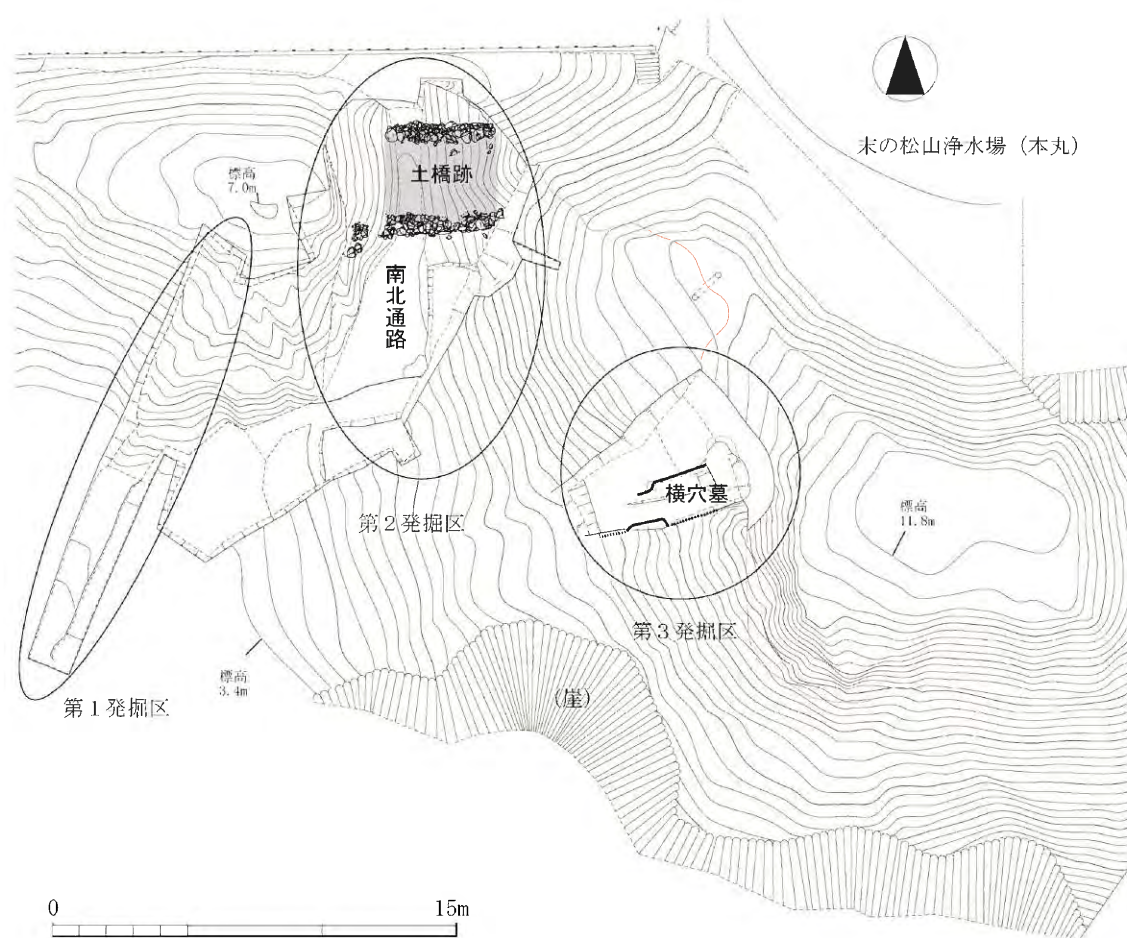
第1図 周辺の市内の遺跡



第2図 八幡館跡発掘調査位置と主要遺構(縮尺: 1/2,500)

水場が建てられ、「古館」にあたる部分には住宅が広がっています。また、現在宮内地区にある八幡神社は元々この付近に鎮座しており、建保年間（1213年～1218年）に移転したことが言い伝えられています。その名残として、明治の地図を見ると字名に「馬場」という地名が残り、当時その場所で流鏝馬を行っていたと言われていました。しかし、今までの調査では堀などが巡っていた形跡が残る程度で全体像ははっきりとしておらず、今回の調査で丘陵の南西に残存していた高まりを中心に調査することで、土塁など新たな情報が得られると期待されました。

その結果、土塁などの形跡は見つかりませんでした。しかし、通路跡・版築や石積みされた立派な土橋・今まで確認されていなかった横穴墓を新たに確認することができました。



第3図 八幡館跡第7次調査主要遺構(縮尺：1/250)

2 各発掘区の概要

第1発掘区

現地地表下 0.5m と 0.8m の深さで、遺構面を 2 面確認しましたが堀の跡などの想定していた遺構は検出できませんでした。また、発掘区南端では現地地表下 1.2m で、地山である遺物の入らない黄褐色砂を検出しましたが、こちらでも想定していた遺構は確認できませんでした。

第2発掘区

表土直下でかく乱や遺物包含層の範囲以外は、丘陵地山あるいは丘陵地山の崩落土で覆われていました。主な遺構は以下の2つです。

- ・東西にのびる丘陵を分断する南北通路

深さ約1.6m、路面幅約1.5mで、長さ約10m分を検出しました。南から北へ向かう上り勾配で路面の標高は南端が約4.2m、北端で約4.4mでした。

- ・南北通路を埋めて広範囲が整地された後の東西方向の土橋

南北通路部分は約1.3mの厚さで盛土によって整地されています。整

地の単位は、炭が混じった層や粘質のある砂の層が互層に数cm～10cm程度に突き固められた版築が用いられ、版築上には東西の丘陵部分を繋ぐ土橋が造られていました。土橋の内部を構築する土の厚さは10cm～20cm単位で積まれ、高さは0.8m程度でした。土橋の断面は台形状になっており、下の幅が約4.4m、上の幅が3.0mでした。土橋の側面には自然石が南面では5～6段、北面では3～4段積まれていました。

さらに、版築土層に含まれる炭化物の年代を放射性炭素年代測定法で調査したところ、西暦1500年前後に炭が焼成された事がわかりました。それは、この通路を埋める際に利用した炭が焼成された事を示しており、この年代近くに土橋も造られた可能性があると云えます。

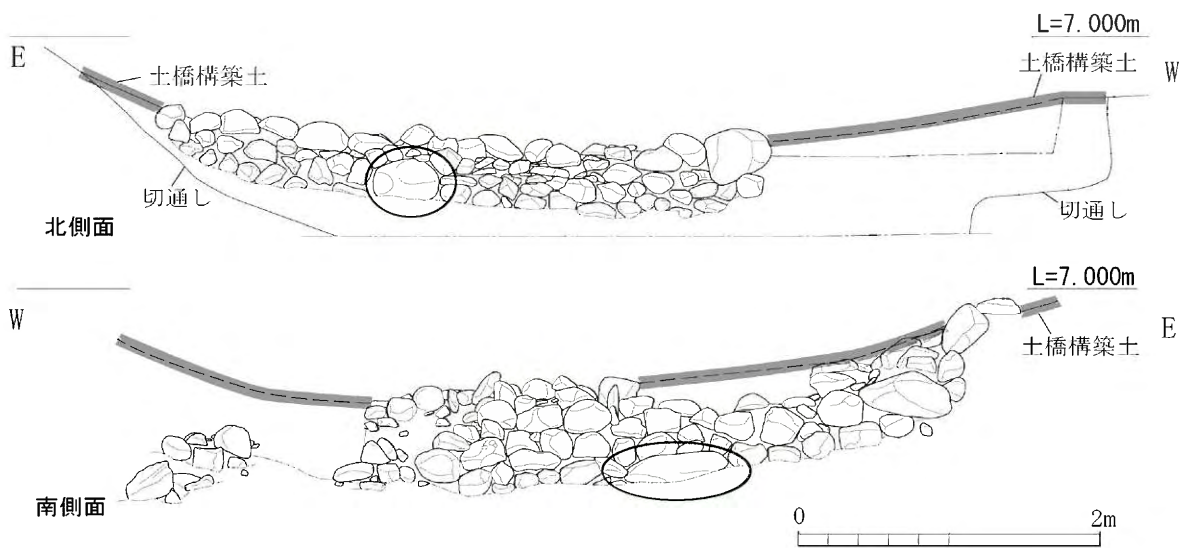
また、今回の版築された範囲が土橋部分以上に南側に大きく広がっていることがわかりました。しかし、版築の土の入れ方は土橋部分より荒くなっていることから、土橋の方がより重要な施設だったことがうかがえます。



南北通路検出状況（南より撮影）



石積み土橋（南より撮影）



第4図 土橋石積立面図(縮尺: 1/50)

その他にも上の図の丸で囲んだ石の配置について興味深いことが考えられます。この石は積み石の中でも大きく、その石を支えるように版築内の土中に大きな石が据えられていました。また、この石を中心に弧を描くように石が据えられていることから基盤の石として使用した可能性があります。

第3発掘区

第2発掘区の土橋を覆っていた土や丘陵の崩落土が南東側の斜面に及ぶことがわかりました。そこで急ぎよ、第2発掘区で見つかった土橋などとの関連を把握するために南東側に発掘区を設定しました。丘陵斜面の崩落土を取り除いたところ、第2発掘区に関係する中世の遺構は見つけることはできませんでしたが、地山上面で7~8世紀の横穴墓を1基確認しました。横穴墓は玄門から玄室にかけて残存しましたが、天井が崩落し、玄室の奥壁付近の地山も崩壊しているため、大きさや形は不明です。現在のわかっている部分から推測すると玄室は奥行1.5m以上で幅が1.5m弱に復元できます。今回の調査範囲は最小限の確認にしていますが、横穴



井が崩落し、玄室の奥壁付近の地山も崩壊しているため、大きさや形は不明です。現在のわかっている部分から推測すると玄室は奥行1.5m以上で幅が1.5m弱に復元できます。今回の調査範囲は最小限の確認にしていますが、横穴

第3発掘区 横穴墓正面(西より撮影)

墓は1基だけ造られることはまれであるため、周辺にまだ未発見の横穴墓が存在している可能性があります。

3 出土遺物について

今回の調査では無釉陶器のすり鉢、瓦質土器のすり鉢が見つっています。無釉陶器とは釉をかけずに焼かれた陶器で固くしっかりとした陶器です。今回発見されたすり鉢は14世紀前後の特徴が見られます。また、瓦質土器は多賀城市内では15～16世紀につくられることが多く、無釉陶器よりも柔らかく、焼きも荒い土器になります。その他にも古銭が出土し、やはり中世に流通した古銭であることが考えられます。

また、石積みを覆っていた土からは江戸時代の焼き物の破片が出土しています。

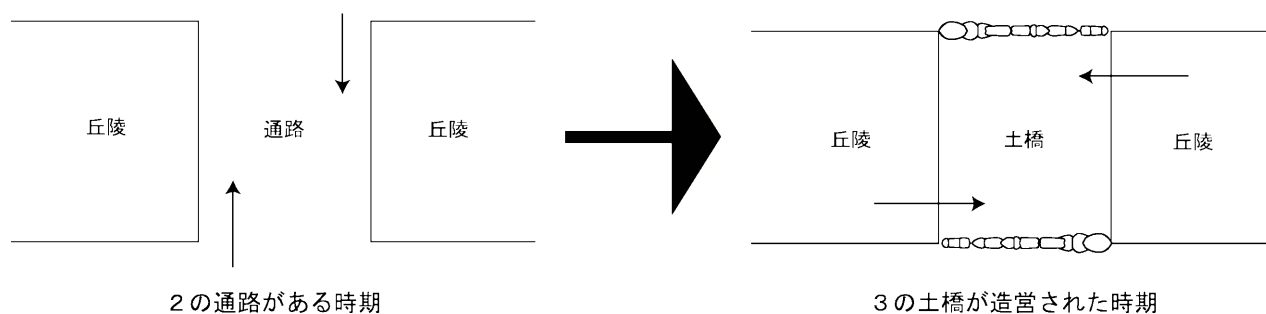
4 まとめ

今回の調査によって、中世の時期に重要な拠点として機能していた様子が、通路や石積みがされている土橋の発見によって確認されました。しかしながら、この石積みの土橋の使用方法は今回の発掘区周辺の状況が不明のため、はっきりとしたことはわかっていません。この調査で判明した全体の流れをまとめてみます。

1. 丘陵南斜面に横穴墓が多く作られる。同じく多賀城市内にある大代横穴古墳との関係を考えて7～8世紀代が想定される。
2. 中世に八幡館の北側の通路として使用されていた。切通し状のため、攻め込むにも狭い道を通らなければならず、防御や通行のための施設だった。
3. 切通し状の通路が何らかの理由で使用されなくなり、版築による大規模な盛土整地が行われた。その際に、石積みのある土橋も同時に造営される。15世紀末～16世紀中頃ということが、今回の出土遺物、炭を使った年代分析によって判明している。
4. 土橋が使用されなくなり、江戸時代に土が覆い石積みの土橋を含めた全体が土の中に埋もれてしまう。

というような流れになります。

さて、なぜこのように版築でしっかりとした整地を行ったのかは現在わかっていません。想定としては城館を外敵から防御するためということが考えられます。しかし、今回の調査では戦いのあった形跡や関連する遺物は発見することができませんでした。





発掘作業風景

現在、周辺は住宅が立ち並んでいる事から今後の調査によって次々と新しいことがわかるということは難しいかもしれませんが、今回発見されたように市内の中心部に横穴墓や中世城館が残っていたことは地域の歴史を知る上でとても重要であり、多賀城が古くから人が生活をしてきた事実を物語っていると云えるでしょう。



調査区全景写真南西より撮影